

栗原 彬・澤 幸祐 (2014).
条件性風味選好における喝水動因の役割
日本心理学会第 78 回大会, 同志社大学.

栗原 彬

動物にとって、適切な食べ物、つまり栄養価が高く毒物ではないものを選択することは、自身の生存と密接にかかわっている。このような選択は学習によって支えられ、試行錯誤から他者を利用したものなどがある。その中でも風味選好条件づけは、動物が自身にとって好ましい食べ物を選択する学習過程を検討するための実験事態である。この実験事態では、学習段階として、人工の風味刺激とショ糖などの甘くてカロリーがある刺激を混ぜた水溶液を動物に複数回与える。その後、人工風味刺激（ショ糖は加えられていない）と水などの中性な刺激を与え、どちらを多く摂取するのかテストするといった手続きが一般的に用いられる。もし風味刺激をより多く摂取するという結果が得られれば、ラットはショ糖と対呈示された風味刺激に対して選好を形成したと言える。

このような選好を形成する要因は様々に検討されてきたが、喝水動因が選好の形成にどのような影響を与えるのかははっきりとしていない。たとえば、喝水動因下におかれたラットはのどが渴いているので水を求める傾向にあるが、甘味などと一緒に呈示された風味刺激に対しては、たとえそれらが水溶性の刺激だとしても避ける傾向がある。喝水動因下におけるラットのこのような行動は、喝水動因があることで甘味が嫌悪的な刺激となり、味覚嫌悪学習をした結果として甘味のある水を飲まない可能性と、甘味は嫌悪的ではないが、のどの渴きをいやすのに適さないためそれを避けた可能性の 2 つが考えられる。

今回の学会発表では、前述のどちらの可能性が正しいか検討した。方法は次の通りであった。訓練時に喝水動因を導入するがテスト時には導入しない条件と、その逆の条件を用意した。もし、喝水動因があることにより甘味が嫌悪になるならば、訓練時に喝水動因を導入された条件では甘味は嫌悪となっているはずなので、テスト時に喝水動因が課せられていなくても甘味と一緒に呈示された風味刺激は避けることが予想される。一方で、甘味が嫌悪刺激とならないのであれば、訓練時に喝水動因が課せられていても風味刺激を選択すると考えられる。実験の結果、喝水動因によって甘味が嫌悪的に働くということではなかった。訓練時に喝水動因があろうがなかろうが、テスト時に喝水動因がある場合に限り風味刺激に対する忌避が認められたので、甘味はそれが水溶性の刺激であっても、のどの渴きをいやすのに適さないことが示された。これらの結果は論文としてまとめられ、現在査読中である。